

特別史跡

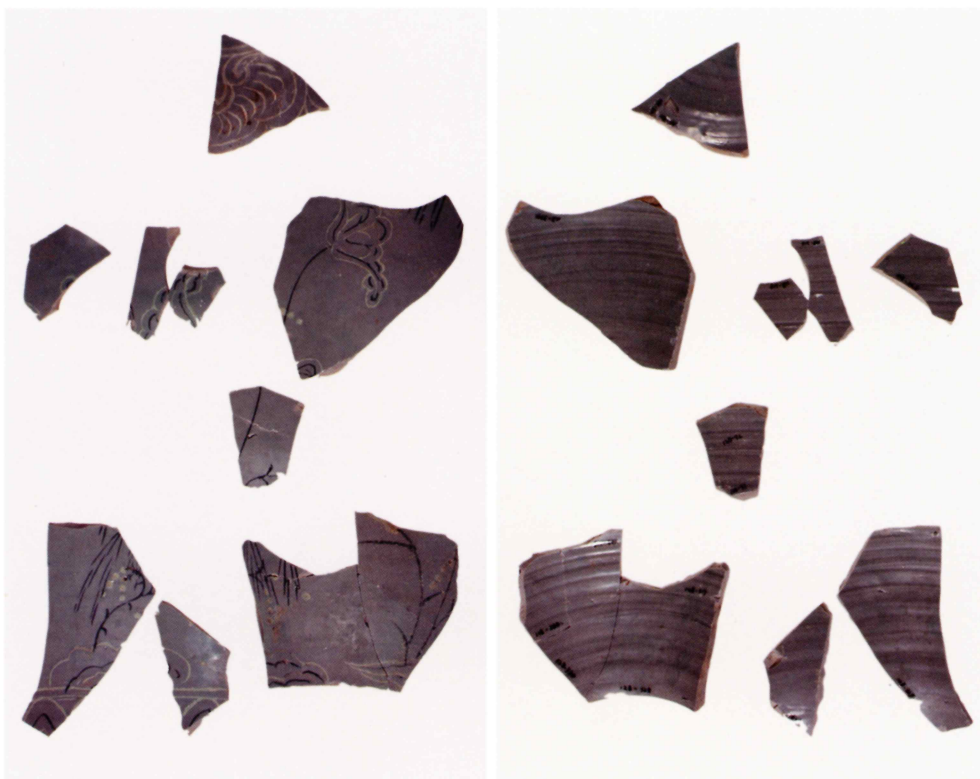
一乗谷朝倉氏遺跡39

平成20年度発掘調査・環境整備事業概報

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館



第127次発掘調査区遠景（南から）



第128次発掘調査出土遺物（高麗青磁象嵌梅瓶）

特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡39

平成20年度発掘調査・環境整備事業概報

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

序 文

当資料館は、平成20年度事業(「第3次中期10カ年計画」の第4年次)を無事終了し、その成果を『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡39 ～平成20年度発掘調査・環境整備事業概報～』として刊行いたします。

発掘調査は、第126次調査(現状変更)・第127次調査(計画調査、上城戸地係)・第128次調査(計画試掘調査、八地地係)の合計2,164㎡の面積を調査しました。第127次調査区は、昭和40年代の圃場整備事業によってかなり削平されていましたが、山裾の区画2-2で一辺約6.6m四方、内側に面を揃えた石列で四周を囲い、その石列の上に根太を敷いて柱を立ちあげた建物が見つかり、建物内部には焼土中に据えられた越前焼の甕群が検出されました。また、遺物では、青磁不遊環瓶、青白磁瓜形水注、元時代様式の染付瓶、木製建築部材、木簡などが出土しました。第128次調査区は、八地谷の北側にある2支谷の東側の支谷で試掘調査を実施し、高麗青磁象嵌梅瓶の破片が出土しました。

環境整備は、平成15年度の第114次発掘調査地(雲正寺地係)で実施しました。北東部の掘立柱建物3棟、南端部の礎石立建物2棟、銅板を丸めた枠の内部を透水性舗装した越前焼大甕の表示等の整備を実施しました。水捌けの悪い所には暗渠排水管を入れるなど配慮しました。また、第113次調査地と県道との間の水捌けの悪い所でも、排水路の確保に努めました。平成21年度には、八地谷川の護岸工事を予定していますので、その実施設計も委託しました。

なお、今年からは、従来からの出土遺物の保存処理事業(10点)に加えて、平成19年6月に重要文化財に指定されました「福井県一乗谷朝倉氏遺跡出土品」(2,343点)の保存修理事業(14点)も開始しました。

一乗谷朝倉氏遺跡は、国の特別史跡、庭園は特別名勝、出土品は重要文化財の指定を受けた重要な遺跡です。今後、国民の文化遺産としてさらなる発掘調査、環境整備、修理、保存処理事業がなされ、より良好な状態で後世に伝えていくことが重要な課題といえるでしょう。そして、朝倉氏遺跡研究協議会をはじめ、一乗谷朝倉氏遺跡活用推進協議会、朝倉氏遺跡保存協会等々いろいろな分野の方々から、あたたかい、時には厳しいご指導をいただいております。今後も、文化庁、福井県、福井市、地元住民と充分連絡を取りあって、山積しているさまざまな問題を速やかに解決していきたいと考えております。ご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

平成21年3月

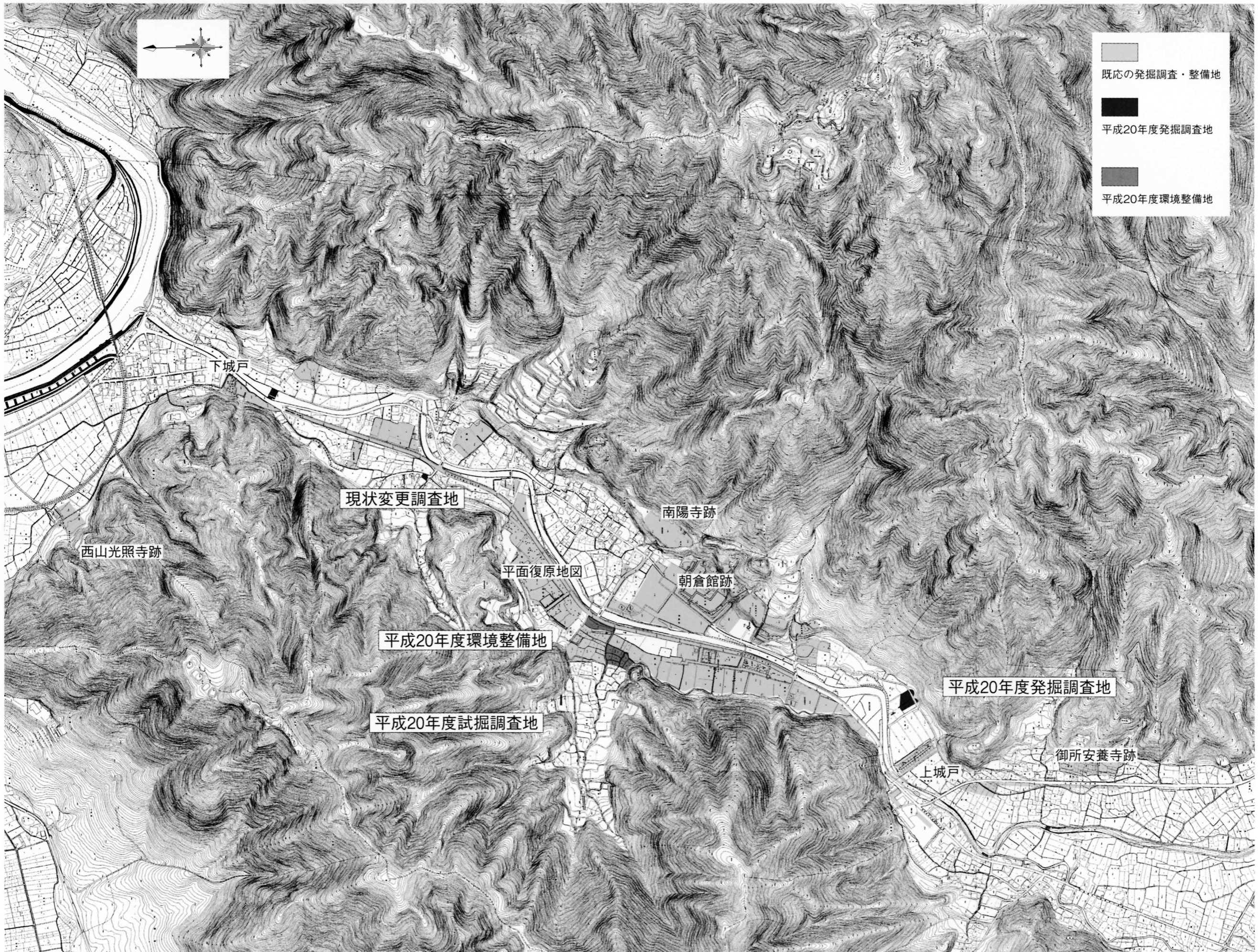
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
館長 水野和雄

例 言

1. 本書は、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館が平成20年度に実施した国庫補助事業による発掘調査、及び環境整備事業の概要報告書である。
2. 本年度は、「発掘調査・環境整備事業第3次中期10ヶ年計画（新中期10ヶ年計画）」の4年次にあたる。本書は、第126次・第127次・第128次発掘調査の成果、第114次調査区環境整備他の概要について収録した。
3. 本書の作成にあたっては、調査担当者が各項目を執筆し、項目末に文責を記した。
4. 遺構番号の頭に付した略記号は以下のとおりである。
SA：土塁(土塀・柵)、SB：建物(礎石・掘立柱など)、SD：溝・濠、SE：井戸、
SF：石積施設、SG：池・庭、SI：門、SK：土壙(柱穴・埋甕等)、SS：道路(通路)、
SV：石垣、SZ：暗渠、SX：その他

目 次

1. 平成20年度の事業概要	3
2. 第127次発掘調査	6
遺 構	6
遺 物	14
3. 第126次発掘調査	19
4. 第128次発掘調査	19
5. 環境整備	22
第1図 平成20年度発掘調査・環境整備位置図	
第2図 第127次発掘調査位置図	
第3図 第128次発掘調査・環境整備位置図	
第4図 第127次発掘調査遺構全体図	
第5～6図 遺構詳細図(1)～(2)	
第7図 SD6279出土遺物	
第8図 第128次発掘調査遺構全体図	
第9図 第114次調査区(雲正寺)整備全体図	
表1 平成20年度事業概要一覧	
表2 第127次発掘調査出土遺物一覧	
表3 第128次発掘調査出土遺物一覧	
写真図版 第127次調査区遺構	P L. 1～5
第127次調査出土遺物	P L. 6
第126・128次調査区遺構	P L. 7
環境整備	P L. 8



第1図 平成20年度発掘調査・環境整備位置図

0 500

1. 平成20年度の事業概要（第1～3図）

平成20年度は第3次中期10ヵ年計画の4年次目にあたり、発掘調査（第126次～第128次）と、環境整備事業（雲正寺地区）をおこなった。

第127次発掘調査の上城戸地係は、城戸に囲まれた城下町の南端に位置し、これよりさらに80mほど南側には昭和63年度の発掘調査で上城戸土塁が確認されている。西側には一乗谷川、東側には一乗城山の山裾に挟まれた地形である。

第128次試掘調査の八地地係は、平成13～17年度に発掘調査をした雲正寺地区の北西に位置する。雲正寺地区の発掘調査では複数の掘立柱建物や墓跡が確認されている。

また、第126次発掘調査は個人宅の現状変更に伴うものである。

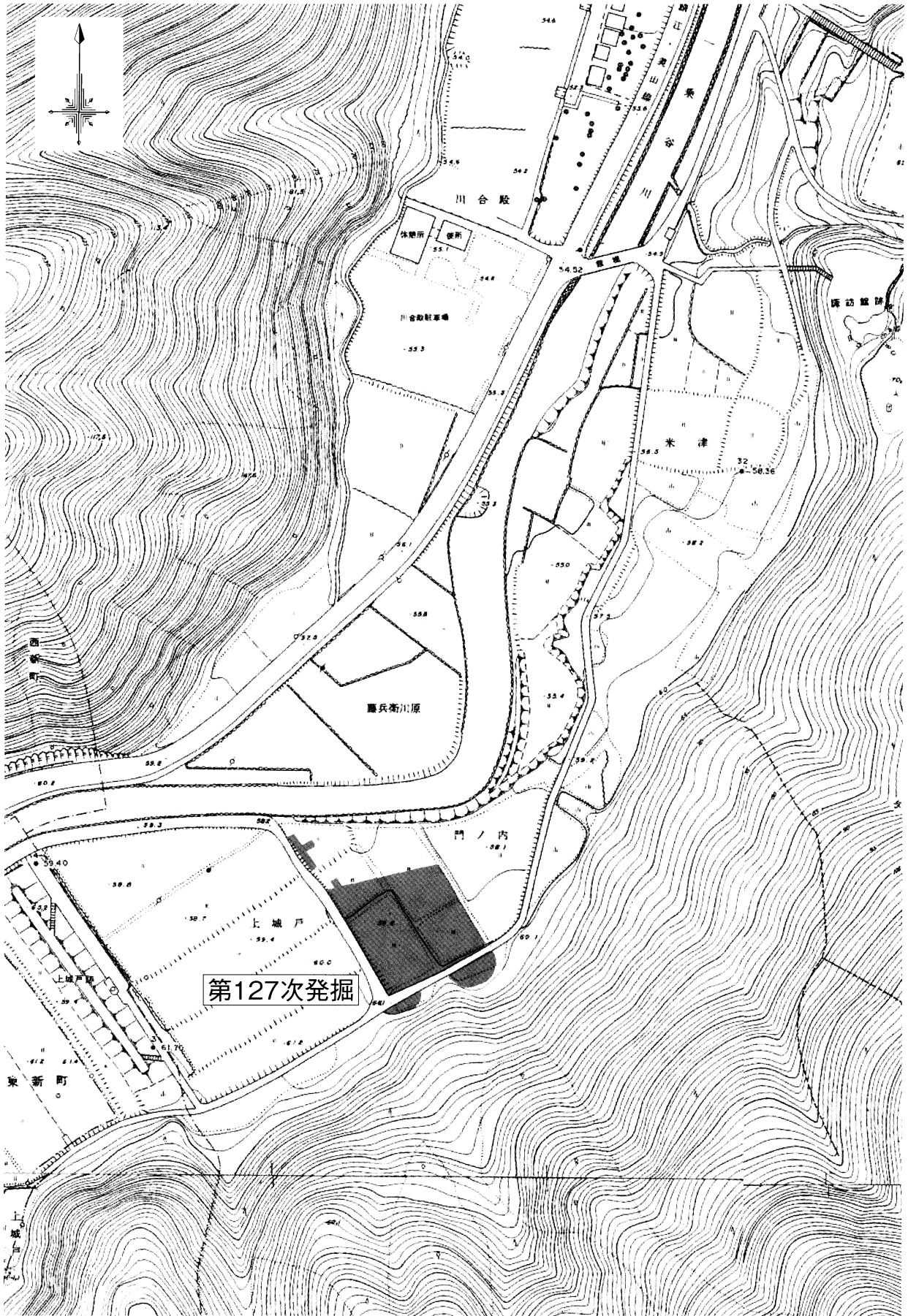
環境整備事業は、平成15年度に発掘調査がおこなわれた第114次調査区であり、平面復原整備工事を実施した。また、今回の工事で雲正寺地区の平面的な部分はほぼ終了することから、この地区一帯を説明するための説明板を設置した。さらに、県道と雲正寺地区一帯の間について修景整備を行った。

（千木良礼子）

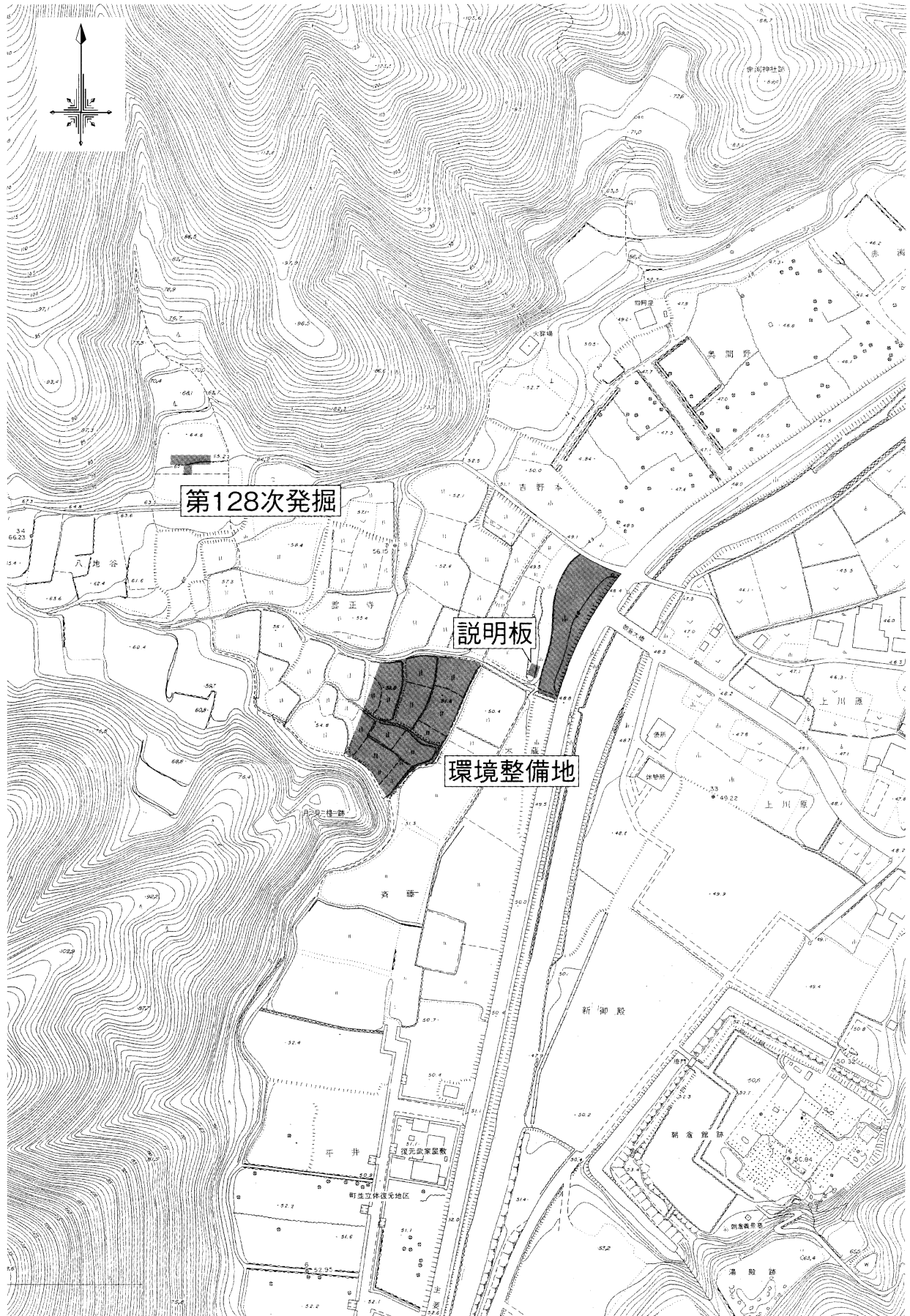
調査回数	調査箇所	調査期間	面積	調査事由
第126次	福井市城戸ノ内町6-76	平成20年4月15日～平成20年5月14日	44㎡	現状変更に伴う調査
第127次	福井市城戸ノ内町字上城戸	平成20年4月15日～平成20年12月5日	2,000㎡	第3次中期10ヵ年計画に基づく調査
第128次	福井市城戸ノ内町字八地	平成20年5月15日～平成20年7月2日	120㎡	第3次中期10ヵ年計画に基づく調査

環境整備箇所等	整備期間	規模	整備事由
第114次調査区(雲正寺)整備	平成20年11月28日～平成21年3月25日	2,500㎡	第3次中期10ヵ年計画に基づく整備
雲正寺地区修景	平成21年2月23日～平成21年3月25日	850㎡	
雲正寺地区説明板設置	平成20年12月19日～平成21年3月25日	—	

表1 平成20年度事業概要一覧



第2図 第127次発掘調査位置図 (S = 1/2000)



第3図 第128次発掘調査・環境整備位置図 (S = 1/2000)

2. 第127次発掘調査

第3次中期10ヵ年計画前半では、遺跡の防御施設である上城戸から、遺跡の中心的施設である諏訪館跡付近までの地区を対象とし、この地区における遺構の性格を明らかにすることを目的としている。当計画以前では、昭和63年度に上城戸土塁（面積約2,000㎡）を調査し、また平成2年度に「一乗谷川水辺空間整備計画に伴う事前調査」として一乗谷川沿いに数箇所の特レンチ調査を実施するにとどまっている。西側は一乗谷川が流れ、東側は山城の裾が広がっており、特にこの山裾では、自然の地形から土塁の形状が想定できるものも確認している。

当計画の1年目である平成19年度は、対象地区の最も北側に位置する米津地区を発掘調査した。ここでは大きな屋敷区画と、金属工房跡や金属加工職人に関する遺物が検出された。今年度は2年目にあたり、上城戸土塁よりやや北側の上城戸地区（面積約2,000㎡）を調査した。

遺構（第4～6図、P L.1～5）

発掘調査で検出された溝などにより、対象地区は区画1～4の屋敷区画に分けられる（挿図1参照）。

【区画1】

区画内は昭和40年代の土地改良事業により大きく削平され、遺構はほとんど残存していない。

SD6250 区画1と2を分ける溝で、約0.4mの幅をもつ。北から南へ勾配がつき、検出された全長は約25mを測る。SV6282の延長と交わる地点を境にして、北側と南側では様子が異なる。まず北側については、西側石が1段で平らな上面が並び、高さが揃う。溝底と西側石との高低差は0.11～0.17mと変化がみられ、川下へ下るに従って差が大きくなる。東側石は2段程度に積んだ状態であるが、天端の高さにはばらつきがみられ、上部は削平されている。一方南側については、両側石の高さがほぼ等しく、SD6279の溝へ合流する。

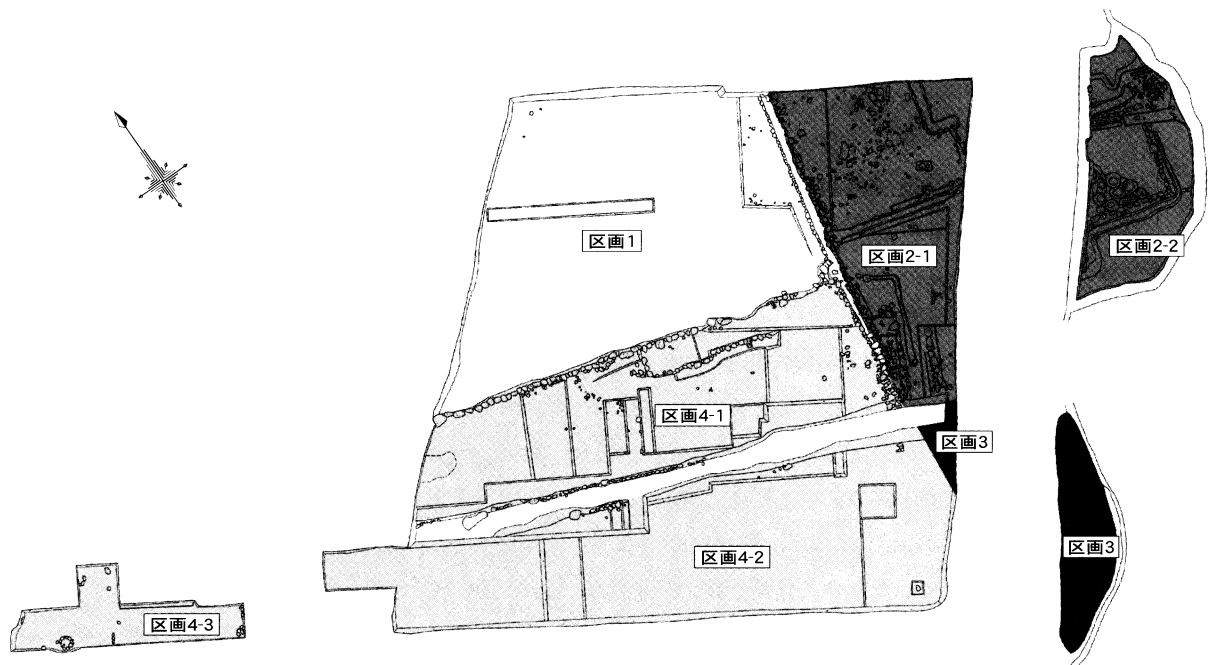
SV6282 区画1と4を分ける石垣である。長さ約23mを測る。高さは中央付近が最も高く、長径0.8～1m、短径0.5～0.6mの石が2石積み、上端から下端まで約2mを測る。

【区画2】

南北方向に遊歩道が通る。遊歩道より西側を区画2-1、東側（山側）の北部を区画2-2とする（挿図1参照）。

区画2-1

SD6252 幅約0.4m、両側石が1段の溝である。山側（東側）から一乗谷川（西側）へ向かって、SD6250へ直角に合流する。但し、合流部についての遺構は石が乱雑した状態のため、不明確である。



挿図1 区画割図

SB6251 SD6250の東側で検出された礎石建物である。石の上面は平らで、礎石列はSD6250とSD6252の軸に揃う。柱間寸法は明確でなく、規模についても特に北側は調査区外であるため確認できなかった。

SD6253 幅0.5～0.8mの溝であるが、東側石は確認できなかった。また、南端でSD6254とつながる。溝底高さはばらつきがあり、勾配の方向は確定できなかった。

SD6254 SD6253とつながる溝である。

SV6274 長さは約4m、高さは最も高いところで0.6mを測る石垣である。石は自然石で、大きいもので長径0.6m、短径0.4mを測る。区画2-2と区画3の間は、山から続いた地形で盛り上がった形状をしており、土塁と考えられる。SV6274はこの土塁を止めるための石垣であろう。

SV6277 長さは7.3m、高さは最も高いところで0.5mを測る石垣である。石は自然石で、大きいもので長径1.1m、短径0.4mを測る。SV6274と平行に並ぶ。

SS6275 間口約1.7mの通路で、SV6274とSV6277に挟まれている。南端はSD6279によって途切れるが、橋のようなもので、南側からSD6279をわたり、SB6251の存在する屋敷地へ入ったのではないかと考えられる。

SD6276 SS6275と平行な素掘の溝である。北側で西へ曲がり、SD6250へ合流するようにみえるが、流末は遺構が途切れていた。

区画2-2

この地区は2時期の遺構が確認された。

上層遺構

SD6255 幅約0.1m、深さ約0.2mの溝である。この溝の北側には地盤が硬い面が広がっていた。

下層遺構

SB6258 南北方向6.6m、東西方向6.4m以上の規模をもつ土台建建物である。礎石の上面を観察したが、柱や土台を置いた痕跡は残っていなかった。礎石は面を内側にもつ。礎石内部の土の様子は突き固めた痕跡はなく、大量の焼土と焼土に混じって遺物が出土した。南北方向の礎石列は、中心に他の礎石（径0.3～0.5m）と比べ、際立って大きい礎石（長径0.7m、短径0.6m）があり、棟持柱がのっていた可能性が高い。東西方向は西端が遊歩道の下まで延びていたため、建物全体の様子はつかめなかった。

SD6272 SB6258を囲むように東側から南側へ曲がる雨落溝である。東側の溝幅は0.4～0.7m、深さは約0.1mである。一方、南側は溝幅0.7m、深さ約0.2mを測る。また、東側は少量の遺物が出土した程度だが、南側は大量の角材、竹、ヘギ板が出土した。角材は断面が長方形、長さが460mm程度で、片側端部に面が残るが、もう一方は焼けており、原形をとどめていない。ヘギ板は屋根葺材、竹は木舞、角材は母屋桁などの上部構造で用いられたもので、壁より屋外側へ突出した部分が焼け残り、雨落溝へ落ちたものと考えられる。

SD6273 SD6272よりも新しい溝で、幅約1mと広く、深さは最も深いところで約0.3mを測る。この溝は西側へ続き、遊歩道の下へ続くため、全体の様子はつかめていない。内部からは木製品や甕の破片が多数出土した。

SK6259～SK6271 SB6258の内部で検出された多数の埋嚢土壌である。土壌は何層にも重なって検出され、土壌内からは甕の破片や釘、漆製品、木製品などが出土した。また、この一帯は上層から掘り下げる段階で大量の炭が含まれていた。

SD6256 上層の固い地盤を掘り下げると、幅約0.6m、深さ約0.2mの溝が、SB6258に並行して検出された。SD6272とは様子が異なり、SB6258の南側で測石（建物側）が存在するが、北側の石は検出されなかった。上部構造に用いられたと考えられる建築部材が出土したが、SD6272で出土した遺物とは様子が異なる。茅葺に用いられるような茅状の遺物や、面皮つきの雑木も出土したことから、母屋の軒ではなく、下屋のような庇がついていた可能性も考えられる。

SB6257 SB6258より北東に石敷きの建物が検出された。面をもつような石敷きの端部は確認できず、また山裾に重なることから、規模も確認できなかった。葺跡と考えられる。上面より、筵と思われる遺物が出土した。

[区画3]

この区画は残存状況が悪く、遺構は確認されなかった。



第4図 第127次発掘調査遺構全体図

[区画4]

SD6279より北を区画4-1、南を区画4-2、さらに西側を区画4-3とする（挿図1参照）。

区画4-1

SV6280 SV6282に平行し、長さ約11mを測る石垣である。

SS6281 SV6282とSV6280との間に位置する道路跡である。SD6250より東側で南へ曲がり、SS6275へつながる可能性も考えられる。

SD6279 SV6282とほぼ並行で、山側(東側)から一乗谷川(西側)へ向かって流れる溝である。溝肩の部分における幅は、上流が約3m、下流が約1.2mと狭くなる。長さは約40mを確認したが、下流はさらに延びて、一乗谷川へ合流していたと思われる。西半分の溝は部分的に石垣が確認された。その他の部分は素掘の状態である。東半分は自然に埋まった状態、西半分は埋め戻して整地をした痕跡を確認した。西側より本遺跡では終末期の遺構に伴う白磁の菊皿が出土したことから、朝倉氏が滅んだ時期までこの溝が存在し、滅んでまもなく埋め戻されたと考えられる。

SV6283 SD6279の北側側面で検出された石垣である。長さ約16mを測る。

SV6284 SD6279の南側側面で検出された石垣である。長さ約4mを測る。

SZ6278 SZ6278の長さは約6mあり、暗渠の蓋となる部分は溝石と同質の自然石(長径0.5～0.7m、短径0.3～0.5m)が並ぶが、上面が揃う様子はみられない。暗渠内部は青灰色の単一の粘土層で埋められており、いっきに埋没したものと思われる。危険を伴うため、発掘は貫通するまでに至っていない。

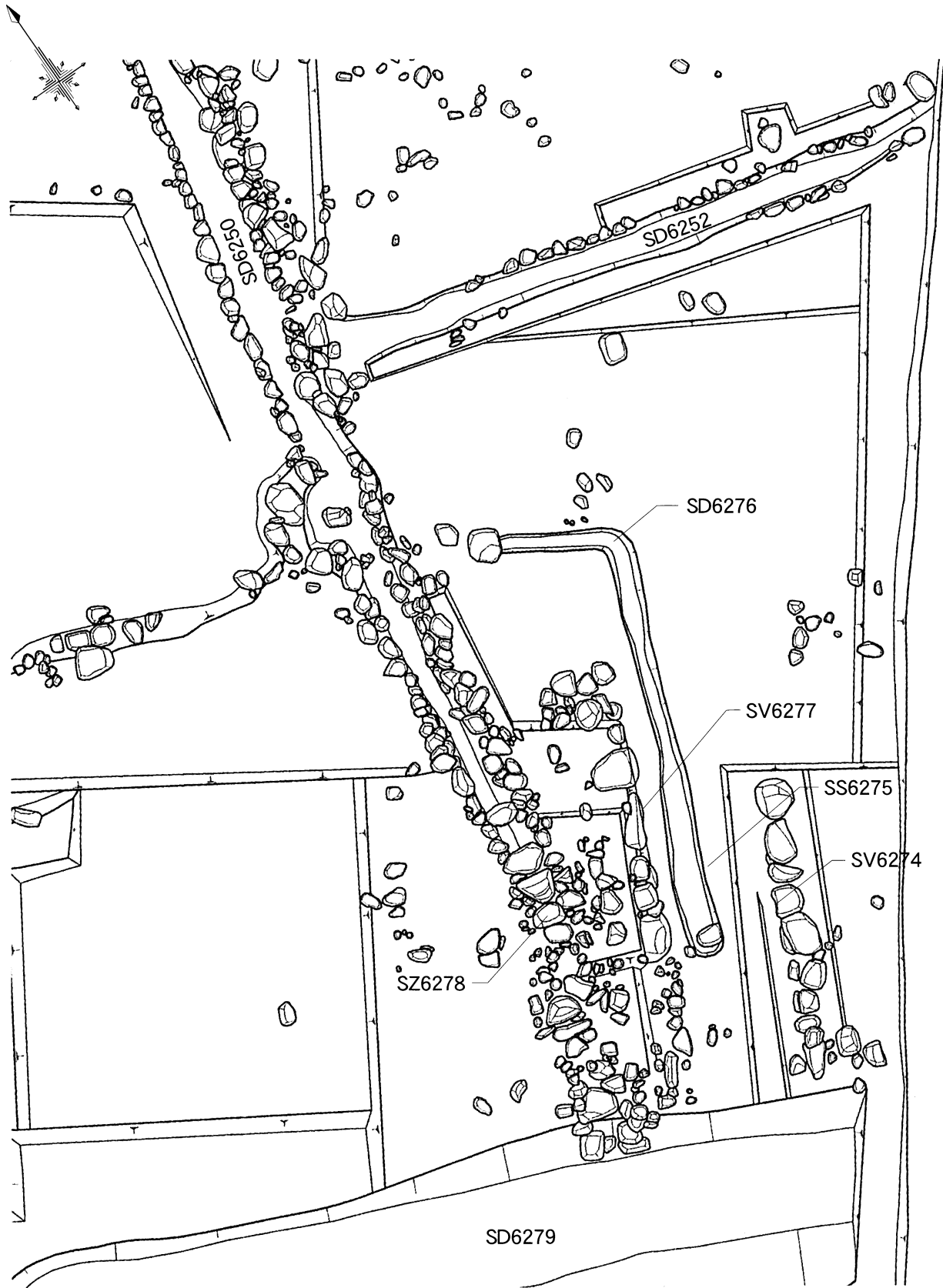
区画4-2

南東隅に礎石を1石確認するにとどまり、他の遺構は削平のため確認されなかった。

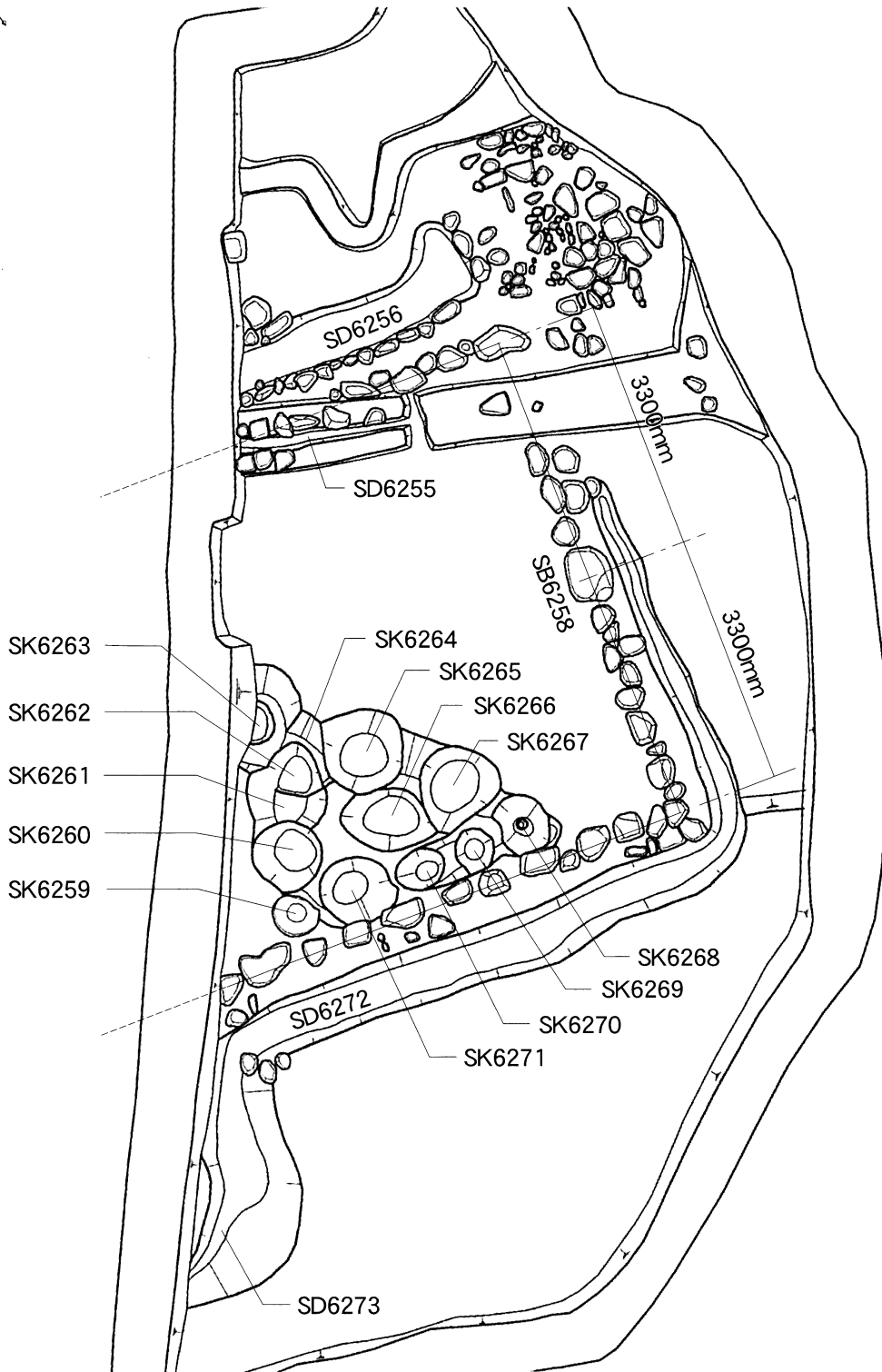
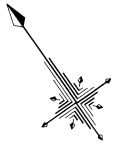
区画4-3

SE6285 開口部の径が約0.6mを測る井戸である。平成2年の一乗谷川水辺空間整備計画に伴う事前調査において、第12トレンチの井戸として確認したものに相当する。

本調査区は全体としては遺構の残存状況がよくない地区であった。しかし、SD6279の大溝や、これに並行する山からの土塁の存在などが確認されたことから、本調査区よりわずか80m離れた南側に、遺跡の入口である上城戸の土塁が存在することとあわせて、遺跡全体の防御施設としての役割を担った可能性が考えられる。
(千木良礼子)



第5図 遺構詳細図(1) (S=1/100)



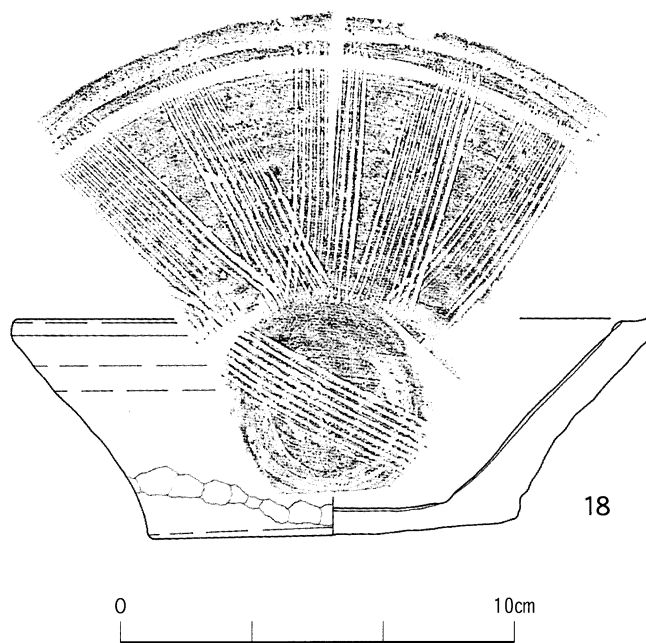
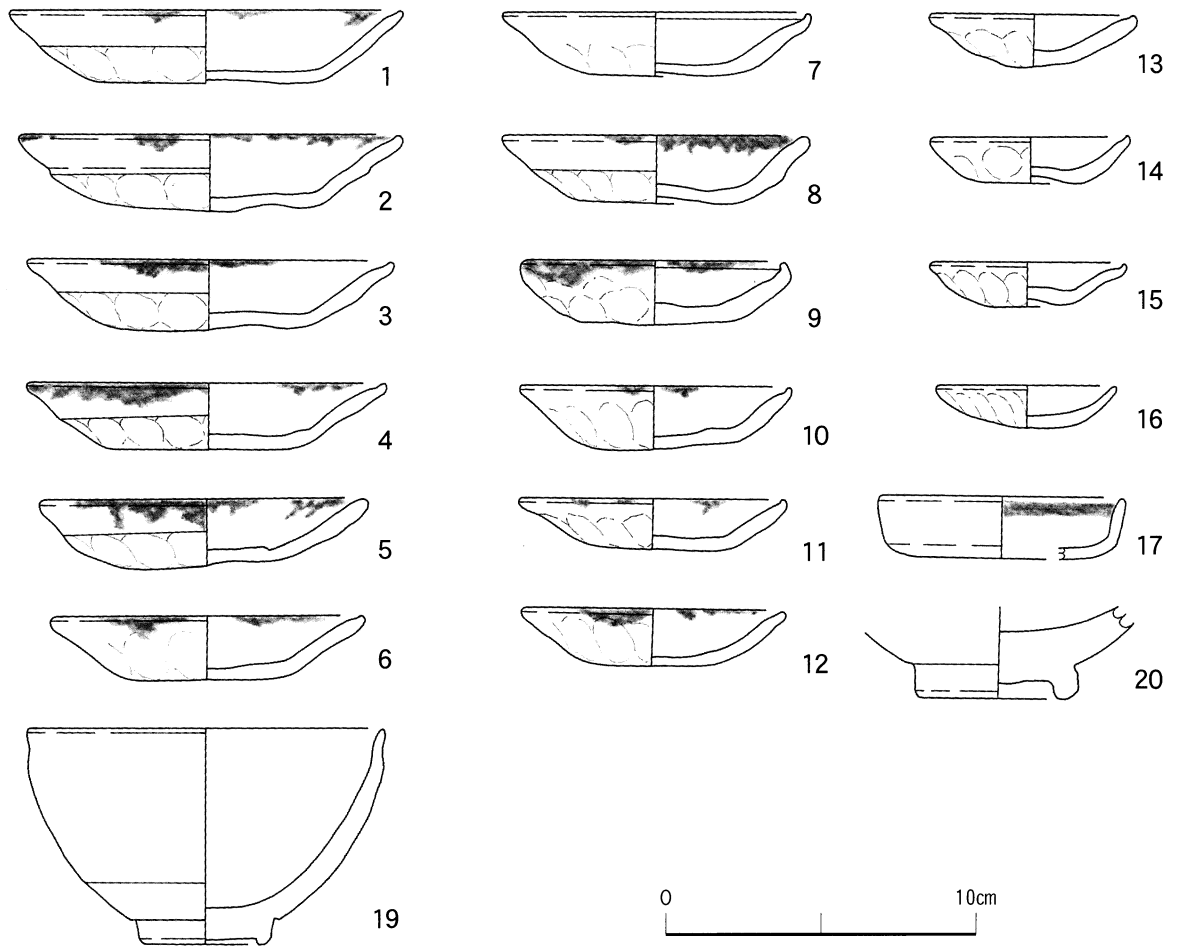
第 6 図 遺構詳細図(2) (S = 1/100)

遺物（第7図、P L.6）

第127次発掘調査により出土した遺物の総点数は9,159点を数え、これを調査面積2,000㎡に対する1㎡あたりの遺物密度で示すと4.58点/㎡になる。この密度は、これまでの発掘調査の中でも大変に低い部類に入るものであるが、この密度が直接的に本調査地点の出土遺物の実態を示しているわけでない。本調査地点は、遺構検出状況からも理解できるように、過去に行われた土地改良事業により遺構面が大きく削平を受けており、遺物も多くが移動しているものと考えられる。

大別	細別	器種	点数	%	大別	細別	器種	点数	%	細別	器種	数量	%
日本製陶器	越前焼	甕	1,250		中国製陶磁器	青磁	碗	34		金属製品	銅銭	4	
		壺	23				皿	30			釘	202	
		鉢	64				鉢	3			飾金具	6	
		播鉢	79				盤	3			小柄	1	
		桶	1				瓶	18			鏝	1	
	小計	1,417	15.47%	水注			13		その他		11		
	土師質	皿	6,419				托	2			合計	225	2.46%
		土釜	49			小計	103	1.12%	石製品	バンドコ	26		
		耳皿	4			白磁	皿	166			硯	2	
		壺	2				坏	9			砥石	2	
		土鈴	5				その他	2			白	2	
	その他	1		小計		177	1.93%	その他		7			
	小計	6,480	70.75%	染付		碗	32		合計	39	0.43%		
	鉄釉	碗	48				皿	41		木製品	木筒	4	
		壺	11				坏	7			付札	1	
		鉢	1				盤	3			札	2	
		桶	7				瓶	3			漆椀	18	
		花生	1			合子	6		漆皿		6		
	小計	68	0.74%	小計		92	1.00%	漆製品	23				
	灰釉	碗	2			褐釉壺	1		折敷		18		
皿		13		中国製合計	373	4.07%	曲物	20					
鉢		5		朝鮮製陶器	鉢	21		箸	2				
小計	20	0.22%	壺		7		栓	1					
瓦質	風炉	3			朝鮮製合計	28	0.31%	櫛	2				
	その他	2		輸入陶磁器合計	401	4.38%	脚	1					
小計	5	0.05%	日本製合計	信楽	壺	1		下駄	5				
国産	桶	1			桶	蓋	4		ヘラ		2		
	須恵器	壺		3		近世	壺	30			箱物	3	
近世	壺	30			日本製合計	8,029	87.66%	桶	18				
小計	8,029	87.66%					楔	1					
							杓	1					
							鏝	2					
							柱	4					
							家具材	1					
							建築部材	131					
						杭	1						
						板材	44						
						へぎ板	6						
						角材	6						
						加工木	72						
						竹材	36						
						製材屑	26						
						不明	8						
						合計	465	5.08%					
						総合計	9,159						

表2 第127次発掘調査出土遺物一覧



第 7 图 SD6279出土遺物

溝出土の遺物 SD6279出土遺物

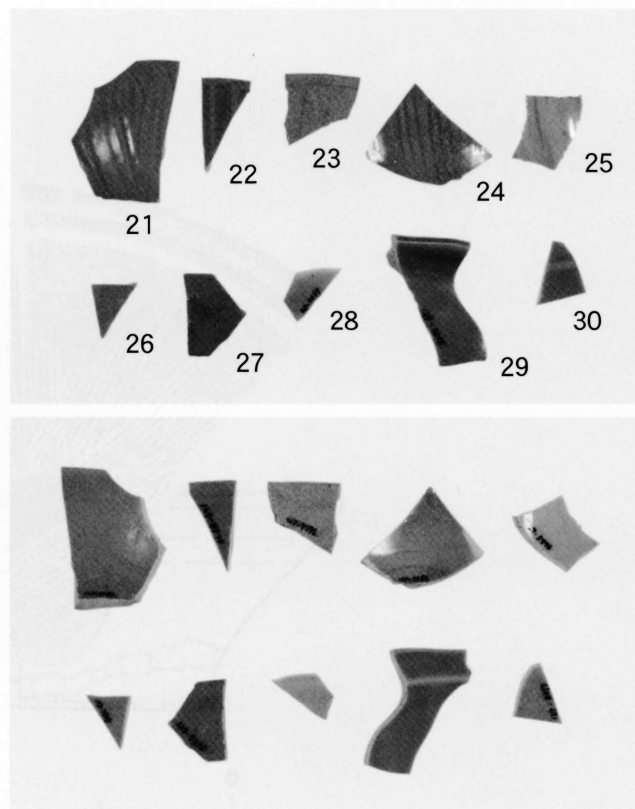
本溝内からは、土師質皿の完形品が多く出土しているのに対し、その他の陶磁器類は小破片が少量出土しているのみである。しかしながら、小破片化している陶磁器の中には本遺構の年代を考えるのに興味深い資料を含んでいることから、それらも含めて報告することとする。

土師質 (1～16) は、土師質皿である。(1～4) は、口径11.6～12.7cm、器高2.2～2.4cmを測る。体部外面下半に指頭圧痕を残し、体部外面上半には横方向の回転ナデ調整を行い、口唇部は小さく摘み上げる。(5～8) は、口径9.8～10.4cm、器高2.1～2.4cmを測る。体部外面下半に指頭圧痕を残し、体部外面上半には横方向の回転ナデ調整を行い、口唇部は小さく摘み上げるタイプ(6・7)と、丸く収めるタイプ(5・8)の2種が認められる。(9～12) は、口径8.3～8.7cmを測る。体部下半には明瞭な指頭圧痕を残し、体部上半には横方向の回転ナデ調整を行っている。口唇部は摘み上げるタイプ(9～11)と、端部を丸く収めるタイプ(12)が認められる。(13～16) は最も小型のものであり、口径5.8～6.6cmを測る。体部下半には明瞭な指頭圧痕を残し、体部上半には横方向の回転ナデ調整を行っている。口唇部は摘み上げるタイプ(13～15)と、端部を丸く収めるタイプ(16)が認められる。(17) は、体部が底部より垂直に立ち上がるという特異な形体を呈する土師質皿であり、口径8.0cm、器高2.0cmを測る。口縁部内面下には、巾約5mmを測る帯状の煤が付着している。

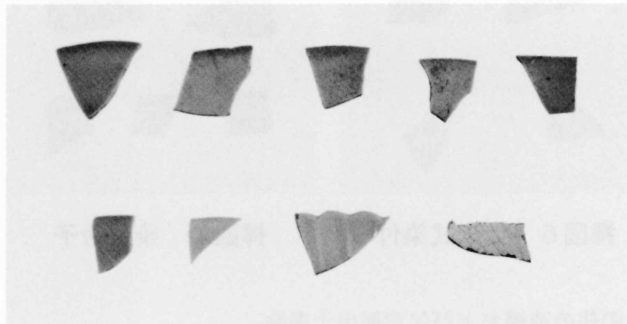
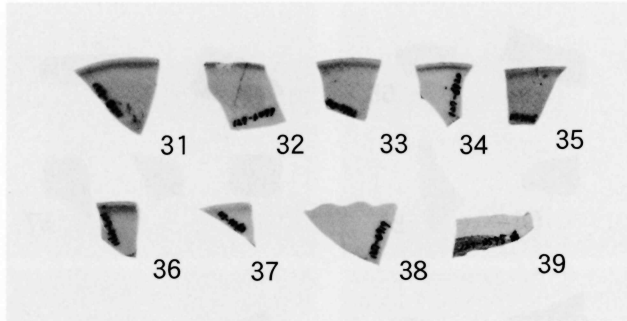
越前焼 (18) は播鉢であり、口径24.3cm、器高8.3cmを測る。内面には9条を1単位とする播目を有する。播目は底部内面にも1単位のみ施している。本遺跡では、IV群に分類している播鉢である。

瀬戸美濃焼 (19) は、口径11.6cm、器高7.0cmを測る鉄釉陶器碗である。体部下半には錆化粧を施し、体部上半から内面には鉄釉を施釉している。

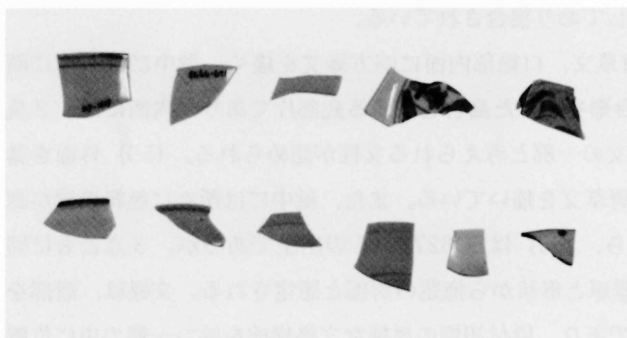
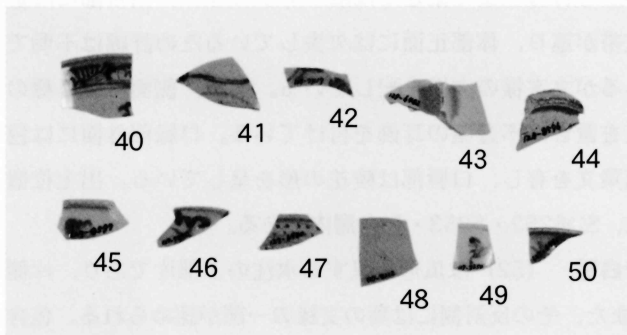
青磁 (20) は碗の底部であり、内面にはスタンプ文を有する。線描蓮弁文の碗であったと考えられる。(21～30) は碗の口縁部片である。(21) は鎬蓮弁文を持つタイプであり、本遺構出土の青磁碗の中では、最も古相を呈するものである。(22) は丸彫による蓮弁文、(23～26) は線描蓮弁文、(27) は無文のものである。(28) は器厚が薄く、口唇部が波状を呈しているこ



挿図2 SD6279出土青磁



挿図3 SD6279出土白磁



挿図4 SD6279出土染付

とから、皿の口縁部片と考えられる。(29)は盤であり、体部内面には丸彫が認められる。(30)は直線的な体部に凸帯が認められることから、琮形瓶のような器形を呈するものと考えられる。

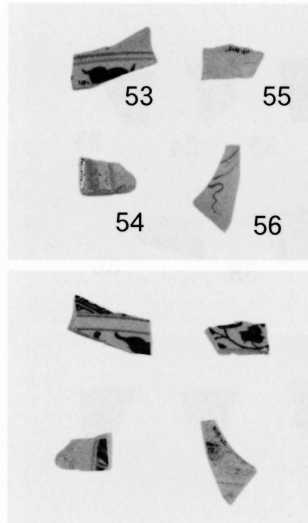
白磁 (31~39)は皿片である。(31~37)は口縁部が外半する端反タイプの口縁部片であり、本遺跡では最も普遍的なものである。(38)は口縁部が波状を呈する菊皿と呼ばれるタイプであり、本遺跡で出土する白磁皿では最も新しいタイプである。(39)は腰部片であり、外面下部は露胎となっている。胎土はやや軟質で淡黄色を呈し、釉色は濁っている。華南系の白磁と考えられる。

染付 (40~44)は碗である。(40)は口縁部に波濤文帯を描き、体部に唐草文の一部が認められる。(41)は広く開いた胴部を持つC群の胴部片、(42)は唐草文を描く体部片であり、C群のものと思われる。(43)はB群、(44)はC群の底部片である。(45~48)は皿であり、(45・46)は口縁部が外反するB群であり、外面には唐草文の一部が認められる。(47・48)

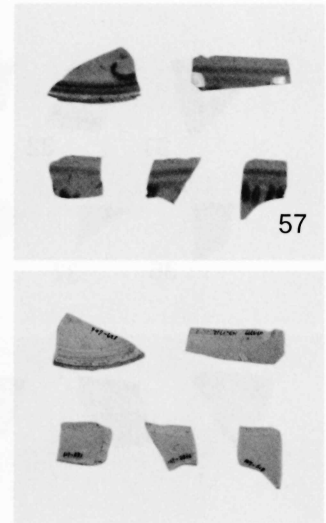
は基筒底を呈するC群の口縁部片であり、(47)の外面には退化した波濤文が認められる。(48)の外面は無文であるが、内面には底部に描かれた界線の一部が認められる。(49・50)は小形の坏である。(49)は体部から口縁部へ直線的に伸びるタイプであり、外面には馬が描かれている。(50)は口縁部が強く外反するタイプである。



挿図5 青磁不遊環瓶



挿図6 元様式染付



挿図7 染付合子



挿図8 青白磁瓜形水注

その他の遺構および包含層出土遺物

青磁 (51) は瓶であり、他にも破片が存在するものの底部から口縁部まで繋ぎでは組みあがらない。高台部には雷文帯が巡り、体部正面には欠失しているため詳細は不明であるが文字様の文様を配している。また、側面には2種の花を置き、不遊環の耳飾を付けている。口縁部外面には芭蕉葉文を有し、口唇部は陵花の形を呈している。出土位置は、SD6252・6253・包含層内である。

青白磁 (52) は瓜形を呈する水注の上部片であり、片側には把手の一部が残存している。また、その反対側には葉の文様の一部が認められる。包含層およびSD6250・6252から出土しており接合されている。

元様式の染付 **染付** (53) は、体部内外面に唐草文、口縁部内面に四方櫛文を描く。釉中には所々に顔料の粒が認められる。(54) は逆台形を呈した高台を有する底部片であり、内面には、2条を1組とした圏線2組の内側に草文の一部と考えられる文様が認められる。(55) 外面を露胎とする底部片であり、内面には唐草文を描いている。また、釉中には所々に顔料の粒が認められる。(53・54) は包含層から、(55) はSD6273からの出土であるが、3点ともに同一個体の可能性が高い。(56) は器厚と形状から梅瓶の肩部と想定される。文様は、肩部を巡る圏線から垂下する線描き文様であり、染付初期の単純な文様構成を持つ一群の中に位置づけられるものと考えられる。包含層からの出土である。

(57) は合子であり、蓋の復原口径は15.0cmを測る。同一個体と考えられる複数の破片が出土しているものの大部分は包含層からの出土品であるが、1点のみがSD6279の埋土内より出土している。
(水村伸行)

3. 第126次発掘調査（現状変更に伴う発掘調査）（P L.7）

本調査は、特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡内に存在する福井市城戸ノ内町6-76個人宅の現状変更にもなう事前調査である。調査面積は約44㎡である。

遺構は東西方向に30～50cm大の石を2段に積む石垣を確認した。残存長は約2.2mである。調査区の端で確認されたため幅は不明である。また、それと交わり南北に延びる10～30cm大の石を乱雑に積む石積列を幅約0.5～1 m、長さ約7 m確認した。

検出状況から、南北方向の石積列は東西方向の石垣より新しく構築されている。また、近世陶磁器が検出されていることなどから近世～近代のものとする。東西方向の石垣の西端には石の据え跡が残っていた。この石垣の明確な時期は判断できないが、中世に構築された遺構と考えられる。出土遺物は約180点である。

遺構の検出状況から現状変更に支障がないことを確認した。遺構は埋め戻され、申請書のとおり現状変更が実施された。

4. 第128次発掘調査（試掘調査）（第8図、P L.7）

調査区は一乗谷川の西側、八地谷扇状地の中腹に位置する。調査地区は通称「八地千軒」とも呼ばれ、従来から中小規模屋敷の集住する地区とされてきた。平成13年から平成17年には、標高約52mに位置する扇状地の裾野を中心に発掘調査された。その結果、八地谷に入る東西道路や武家屋敷、寺院、町屋が確認された。

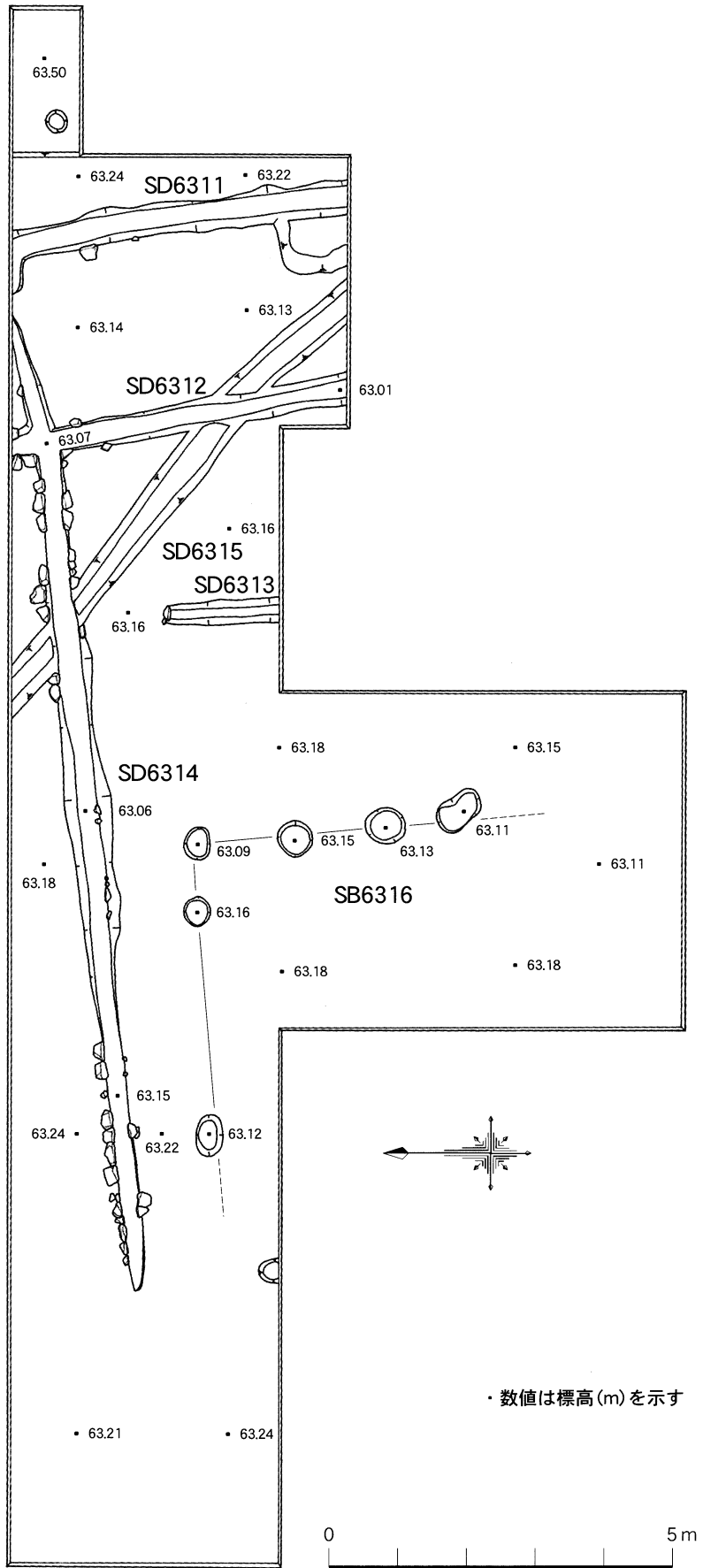
今回の試掘調査区は八地谷北側に展開する2支谷のうち東側の支谷、標高約64.6mに設定した。この地点からは朝倉義景館を望むことができる。また、周辺には五輪塔などの石造物が散在し、清原宣賢の墓石は当初この付近に存在したともいわれている。

調査区は東西方向に長く、南北方向では東西に延びる2～3段積の石垣を横断するように設定した。調査により近世・近代のピット群を確認した上層（第1面）、近世と考えられる小区画の田畑群を確認した中層（第2面）、そして中世の遺構を確認した下層（第3面）の3面を検出した。

ここでは第3面の中世の遺構について述べる。遺構は南北に走る溝を3条（SD6311～6313）と東西方向に延びる溝が1条（SD6314）検出された。これらの溝は石組の溝であったと思われるが、直上の第2面である田畑利用の際に掘削されている。SD6315は第2面の田畑に関係するものである。その他、礎石の据え跡が検出され規模は未確定だが礎石建物1棟を確認した。建物の軸と溝の方向はほぼ一致する。また、東西に延びる石垣を横断する断面観察より、この石垣の構築時期は近現代であることが分かり、第3面は石垣の南側にもほぼ同じ標高で広がっていることが確認できた。

出土した遺物の破片総数は719点である（表3）。大形品が多い越前焼は出土する際に破片数も多くなるのが通常であるが、この表からは土師質皿の出土点数が多いことがわかる。また、1個体の高麗青磁象嵌梅瓶（巻首図版）と考えられる破片がまとまって出土した。

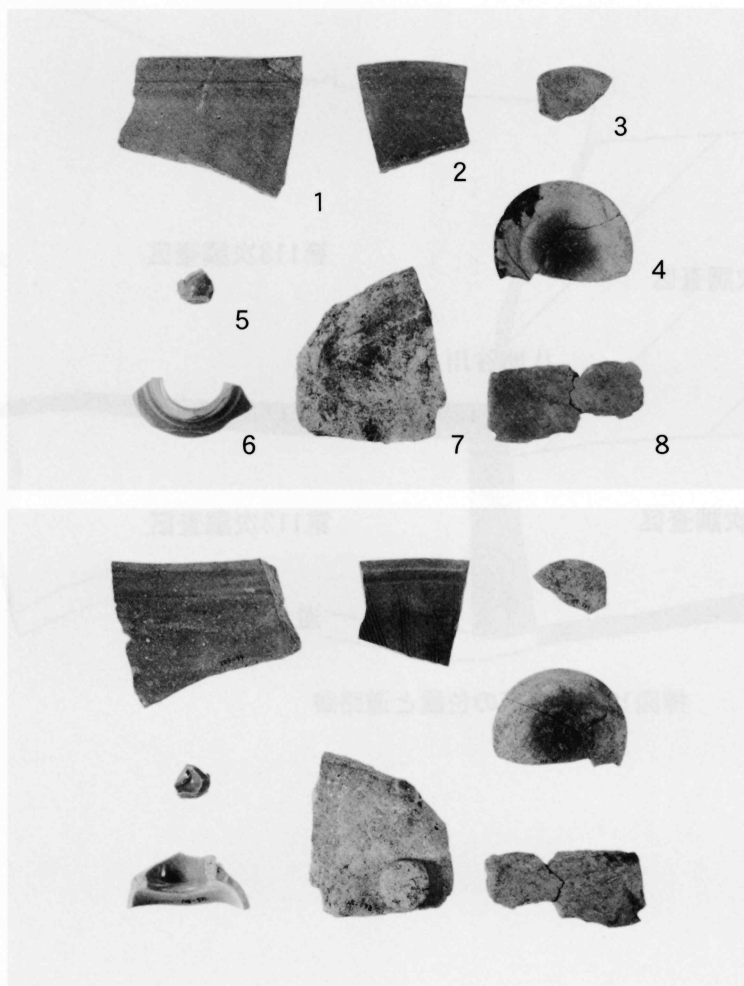
今回の遺構の検出状況や遺物の出土内容は、この支谷全体の様相を示すものではないだろうが、この調査地が小区画の町屋ではないことは明らかである。（川越光洋）



第 8 図 第 128 次発掘調査遺構全体図

器種				器種				器種					
種	点数	%		種	点数	%		種	点数	%			
日本製陶器	越前焼	甕	138		中国製陶磁器	青磁	碗	2	金属製品	銅錢	2		
		壺	19				皿	26		釘	16		
		鉢	4				鉢	1		鉛玉	1		
		播鉢	14				盤	1		キセル	1		
		桶	2				香炉	2		その他	10		
	計	177	24.62%	花瓶		1	計	30	4.17%				
	土師質	皿	311			その他	1			石製品	バンドコ	1	
		壺	1			計	34	4.73%	盤		1		
		計	312	43.39%		白磁皿	32	4.45%	砥石		1		
	鉄釉	碗	13			染付	碗	9			鉢	3	
		壺	1		皿		12		碁石		12		
	計	14	1.95%	その他	4			その他	7				
	灰釉	皿	7		計	25	3.48%	計	25	3.48%			
		壺	2		褐釉壺	2	0.28%	木製品 不明	1	0.14%			
	瓦質不明	2	0.28%	朝鮮製陶磁器	18	2.50%	その他	羽口	1				
	信楽	4		小計	111	15.44%		焼土塊	4				
国産陶器不明	3					計	5	0.70%					
近世・その他	26					小計	61	8.48%					
計	33	4.59%				合計	719	100.00%					
小計	547	76.08%											

表3 第128次発掘調査出土遺物一覧



越前焼甕 1 播鉢 2 土師質皿 3・4 青磁器種不明 5 壺 6 石製品盤 7 羽口 8

挿図9 第128次調査出土遺物

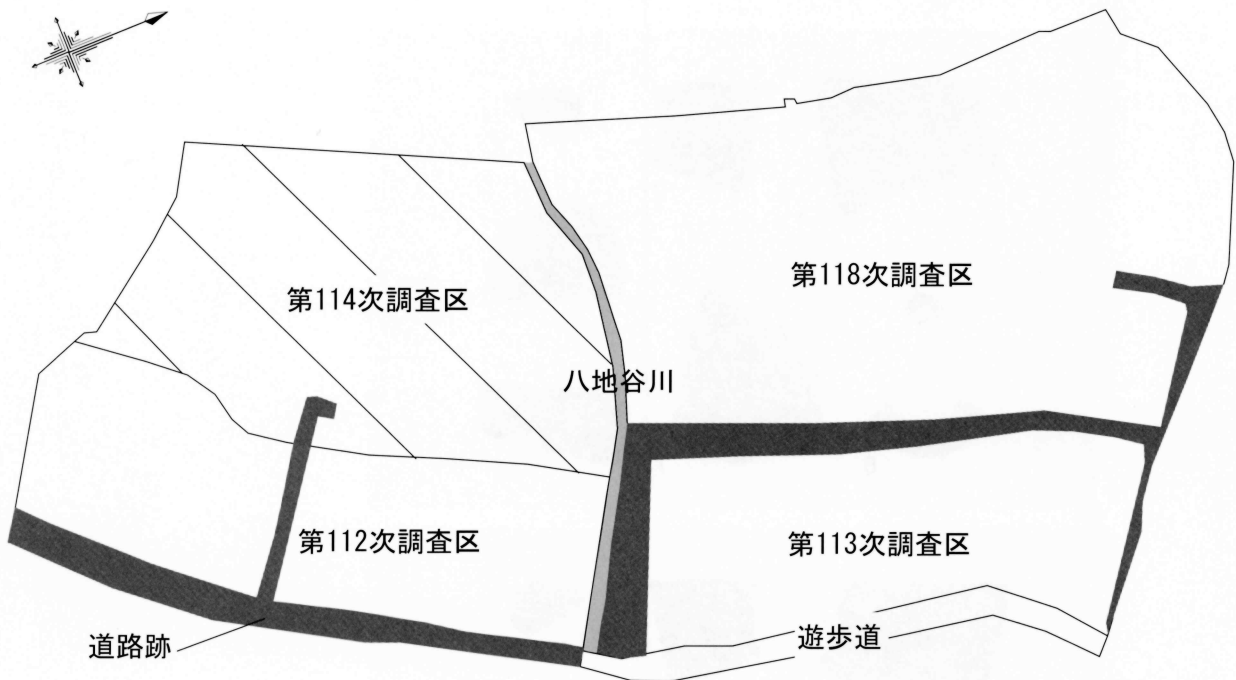
5. 環境整備（第9図、P L. 8）

環境整備（一般）

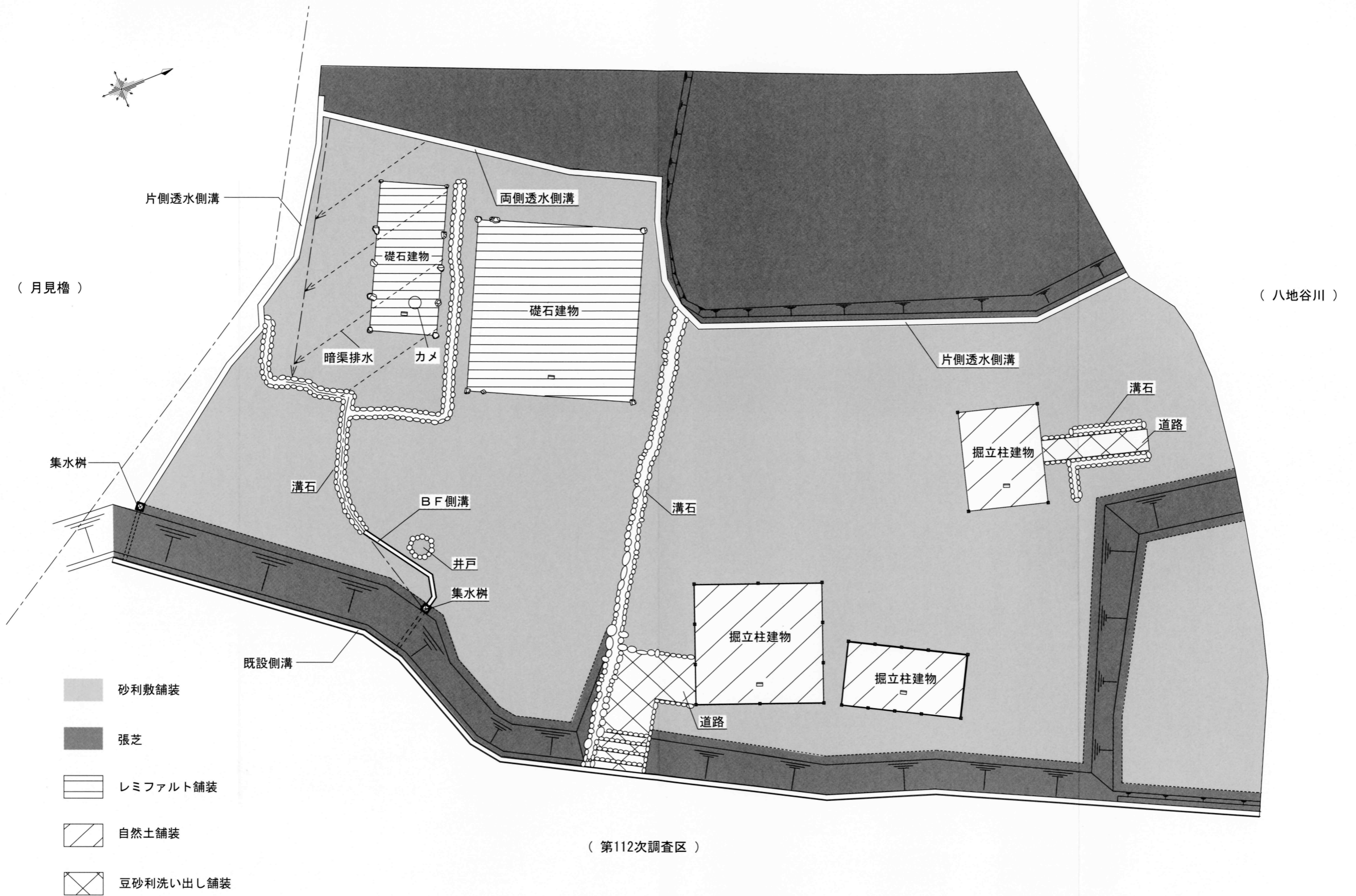
今年度はこれまでに発掘調査をおこなった雲正寺地区の全地区のうち、最後の1地区である第114次調査区の整備工事をおこなった。今年度の第114次調査区の整備工事により、雲正寺4地区の整備はほぼ完了となった。

4地区は八地谷川を境に北側と南側に分けられる（挿図10）。そのうち北側の2地区（第118次調査区と第113次調査区）は個々の遺構復原にとどめ、大部分を芝生植栽として修景的整備をおこなった。一方南側の第112次調査区では、町屋や中規模武家屋敷等を復原し、遺構見学のできる整備をおこなった。またその際に、第114次調査区まで続き、平面復原地区と町並立体復原地区を結ぶ南北道路跡の支道を復原した。そこで今年度はこの連続性を生かし、見学のできる遺構復原をおこなうこととした。

また他に、修景工事と説明板設置工事をおこなった。



挿図10 4地区の位置と道路跡



(第112次調査区)

第9図 第114次調査区(雲正寺)整備全体図

(1) 第114次調査区（雲正寺）整備工事

平成15年度に発掘調査をした第114次調査区（雲正寺地係）は、2,500㎡を測る。その周囲は、北に八地谷川、東に第112次調査区が広がり、南は頂部に月見櫓を有する尾根によって区切られ、西は未調査地となっている。

発掘調査では、敷地の南西部に大規模建物が数棟検出され、このうち礎石列が比較的良好に検出された2棟を復原した。うち1棟についてはカメ跡が確認された。

また敷地の東側は、平成13年度におこなった第112次調査区に連続した遺構検出が期待されたが、後世の削平により全体像の把握には至らなかった。しかし本区画の特徴として、掘立柱建物が密集して確認されたことが挙げられる。本遺跡において、このように特定の範囲に密集して検出された類例はない。

その他付属施設として溝、井戸、道路、土壇、方形石積施設等が検出された。

これらのうちから、礎石建物、掘立柱建物、溝、井戸、道路、カメ跡といった、比較的規模等が判明した遺構を復原整備した。

平坦地の大部分は、山砂で遺構保護した上に防草シートを敷き砂利敷舗装とした。これは **舗装** 管理が比較的容易であるため、これまでの雲正寺地区の整備でも採用しており、共通性を持たせることで景観にも配慮した。一方、西部は一段高くなっており、区画の大部分が未発掘地の西方へ延びているため張芝とし、将来的な整備に対応できるようにした。また敷地内で段差がついていた北東部の法面は、山土を使用して張芝とした。ただし八地谷川護岸に接する部分は、来年度工事の仮設路として使用するため、整地のみとした。

礎石建物は南西部に2棟復原した。礎石位置は一部復原し、建物内部は碎石基礎の上にレ **礎石建物** ミファルト舗装で施工した。砂利敷舗装との建物境界には越前瓦（銀鼠色）（幅240mm×奥行25mm×高さ120mm）を用いた。またカメ跡は銅板で枠を整形し、内部を透水性舗装とした。埋め殺しの銅板を設けることで、気温変化等でひび割れが生じないように配慮した。

掘立柱建物は比較的規模が判明した3棟を復原した。柱位置は掘方のある位置から推定し **掘立柱建物** た。柱は150mm角、高さ400mm、十分の一面取を施した栗材を用い、ACQ加圧を注入処理した。建物内部は碎石基礎の上に自然土舗装で施工し、砂利敷舗装との建物境界には越前瓦（赤色）（幅240mm×奥行25mm×高さ120mm）を用いた。

南東部から検出された井戸には、玉石φ300mm内外を使用し、内部は防草シートの上に **井戸** 砂利敷舗装とした。

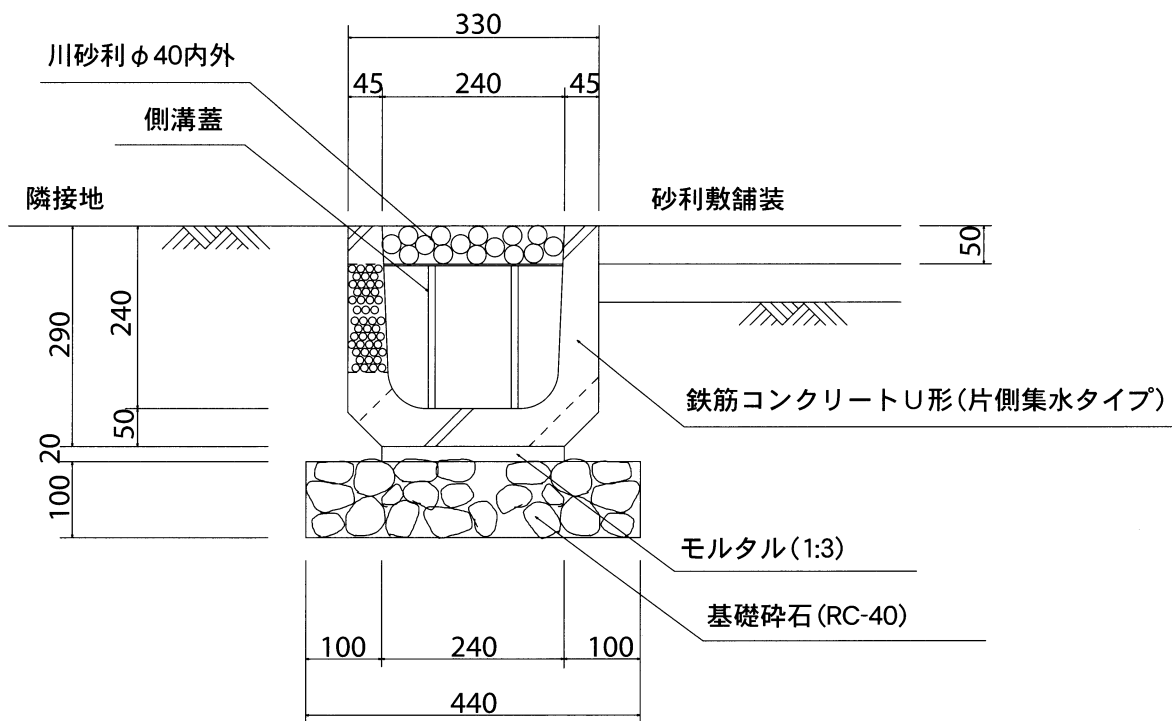
また南端部からは石垣が長さ約14mで検出されたが、北側を後世の削平により欠失して **石垣** おり復原が困難であったため、山土で盛土して石垣を保護し、法面を張芝とした。

道路は豆砂利洗い出し舗装とし、第112次調査区からの道路を延長した。 **道路**

遺構表示石は礎石建物、掘立柱建物について設置した。表示石は花崗岩を幅350mm×奥 **遺構表示石** 行200mm×高さ300mmに加工したものをを用い、前面及び側面はこぶ出し仕上げ、上面を本磨きにして文字を陰刻した。

排水は対象地全体に山側から県道側へ水勾配をつけた。なかでも山側からの水が集まりや **排水** すい南西部に暗渠排水管を入れた。また山側に沿って片側透水側溝を用い、山側からの水が整備地に流れないように配慮した（挿図11）。それらを第112次調査区内に整備した側溝に流し、八地谷川へと排水した。

溝は玉石φ300mm内外を使用し、底打ちは透水性舗装とした。 **溝**



挿図11 片側透水側溝断面図 (S=1/10)

(2) 雲正寺地区修景工事

対象地区は第113次調査区と県道の上に位置する。

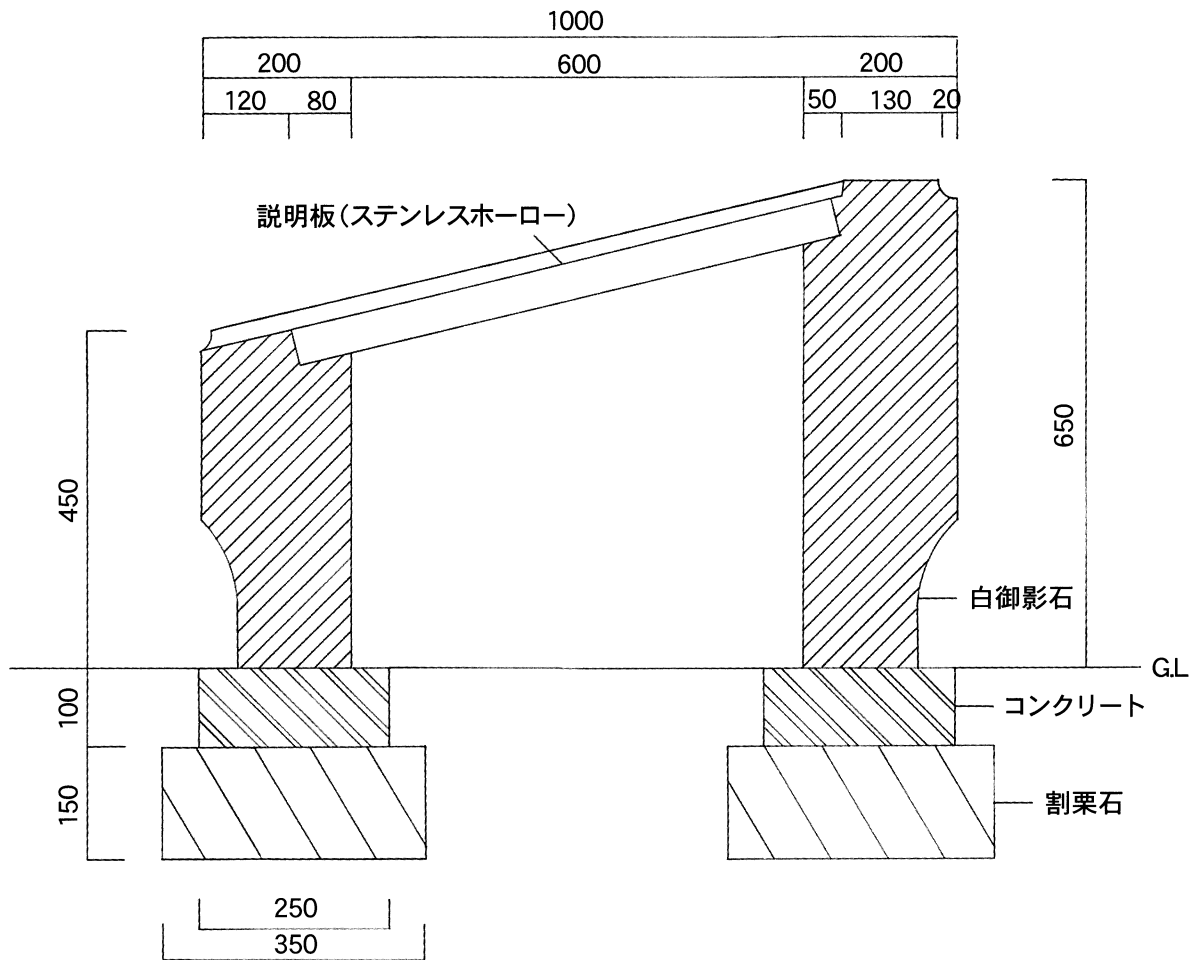
以前から地盤の不陸が多く、また谷地形にあって水が集まりやすく、雨量の多い時は特に排水が不十分な地区であった。そのため不陸調整をおこない、素掘りの溝をコンクリート二次製品に置き換え、排水路の確保をおこなうとともに、道路との境界を明確にした。また、斜面等の土を安定させるために芝生植栽をおこなった。

(3) 雲正寺地区説明板設置工事

今年度の整備により雲正寺地区の工事がほぼ完了することから、雲正寺地区全体を対象とした説明板を新設した。

本遺跡では説明板の基台に笏谷石を使ってきたが、近年の笏谷石の産出量では同形の説明板を作ることが難しくなったため、白御影石を使用した。4枚の石板を組み合わせ、これまでの説明板と同じ形態とした。また石に磨きをかけないことで、落ち着いた色合いになるよう配慮した。板は1200mm×760mmの大きさの陶板を使用し、カラーで分かりやすい説明を目指した。

板の内容には文章・図面・写真を組み合わせ、3ヶ国語（英語、中国語、韓国語）の翻訳を適宜入れた。雲正寺地区の特徴として、南北・東西道路や八地谷川護岸石積等をあげ、それらの検出から考察される点を説明した。
 (藤田若菜)



挿図12 説明板断面図 (S=1/10)



SD6253、SB6251、SD6250(東より)



SV6274、SS6275、SD6276、SV6277、SZ6278全景(北より)



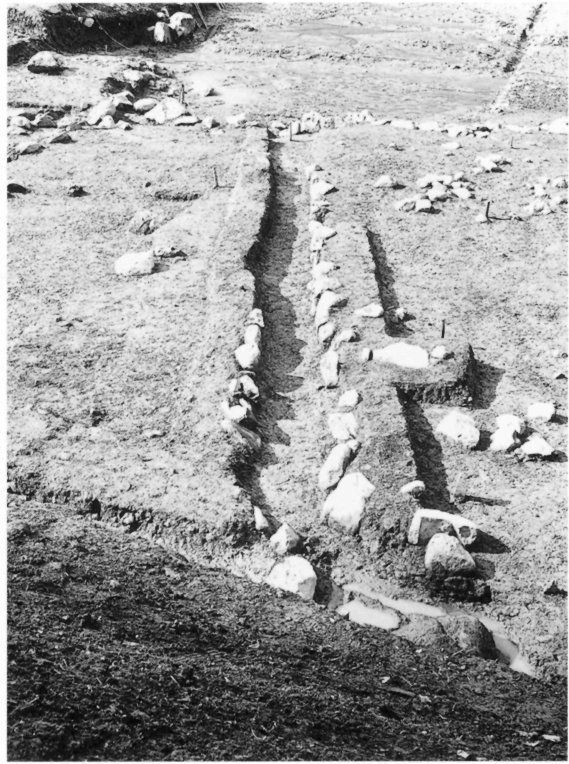
SV6274近景(西より)



SV6277近景(東より)



SD6250、SZ6278近景(北より)



SD6252近景(東より)



SD6250近景(北より)



SD6279全景(東より)



SZ6278近景(南より)



SV6284近景(北より)



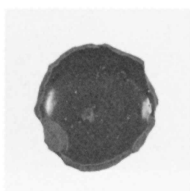
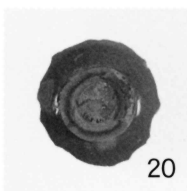
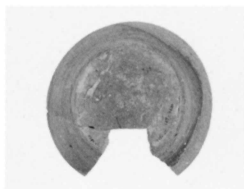
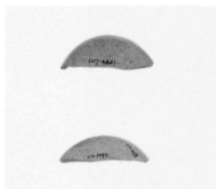
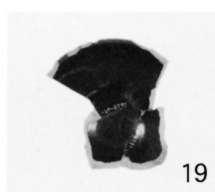
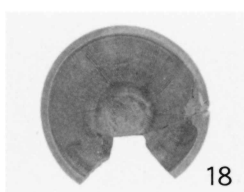
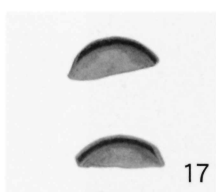
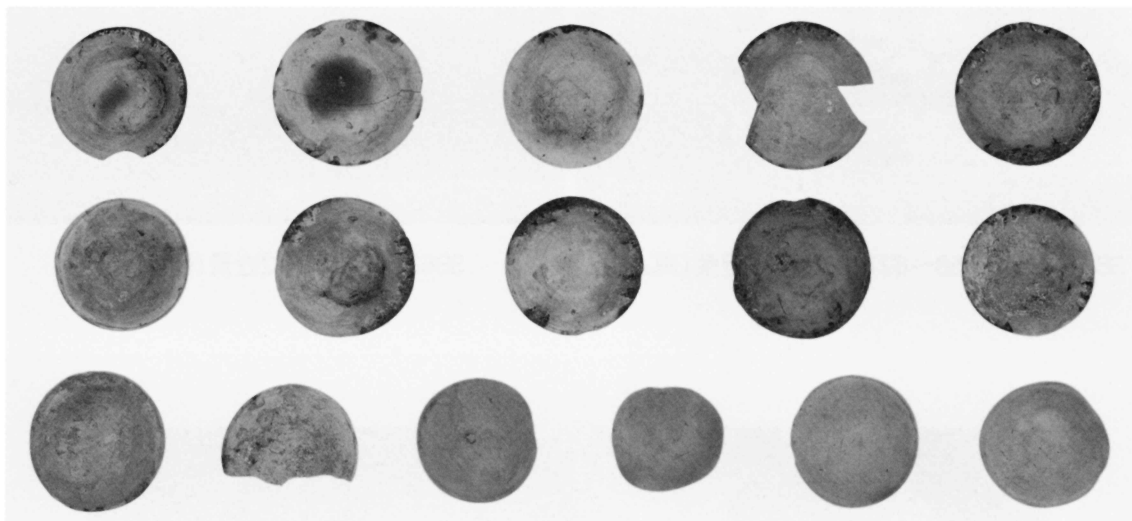
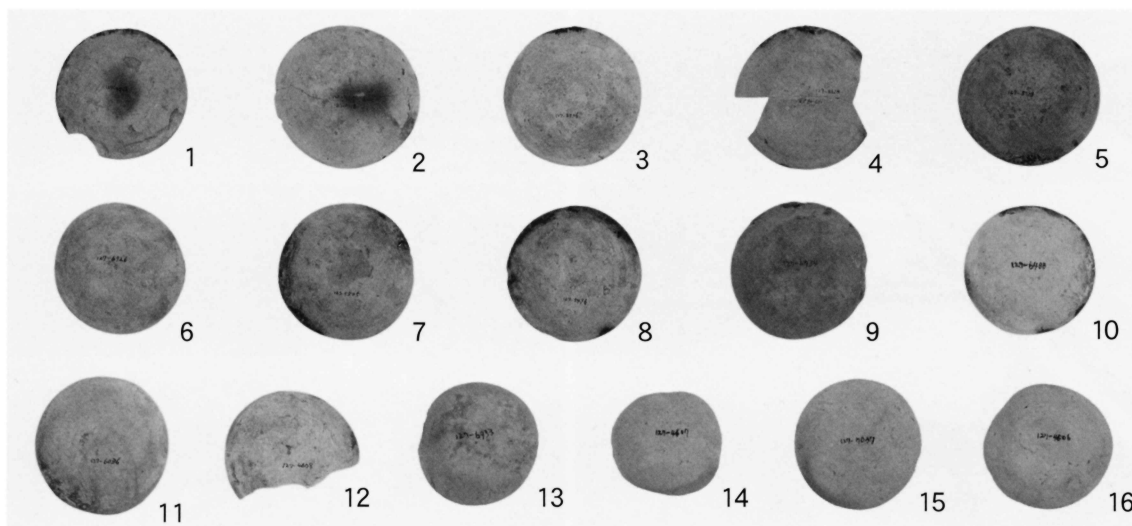
SB6258、SK6259～6271、SD6272近景(南より)



SB6258、SD6272近景(西より)



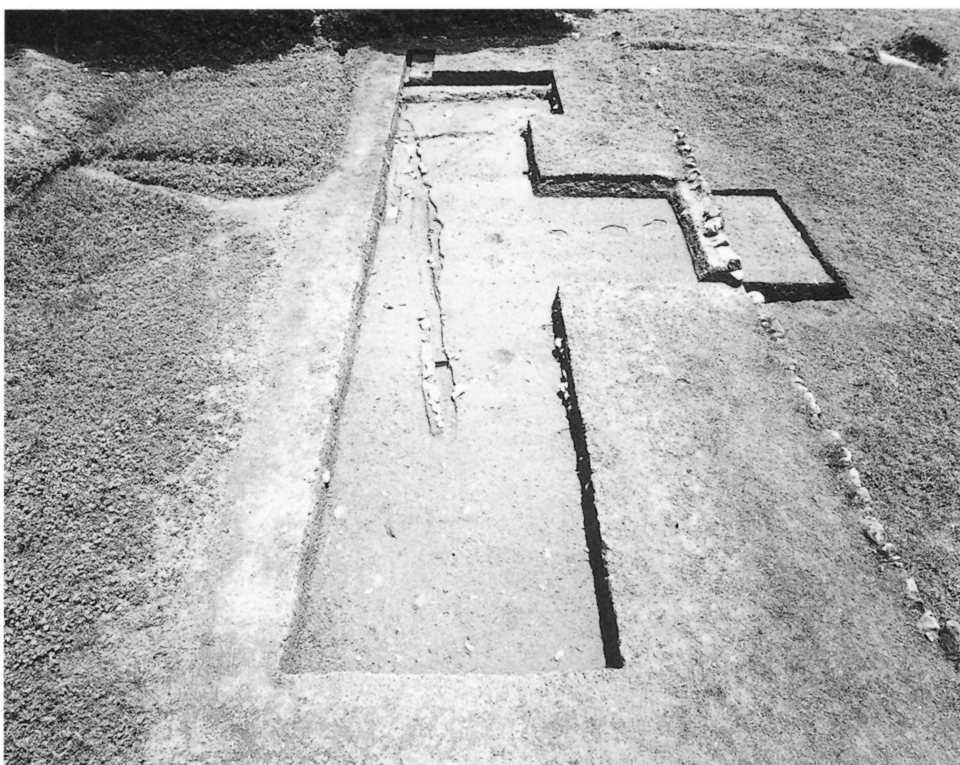
SK6259～6271近景(南より)



SD6279出土遺物



第126次調査区全景(南より)



第128次調査区全景(西より)



第114次整備地(西より)



雲正寺説明板

報 告 書 抄 録

ふりがな	とくべつしせきいちじょうだにあさくらしいせき
書名	特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡39
副書名	平成20年度発掘調査・環境整備事業概報
シリーズ番	39
編集者名	千木良 礼子
編集機関	福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL. 0776-41-2301
発行年月日	平成21年3月31日

調査地区	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' ''	° ' ''			
第126次調査	福井市城戸ノ内町6-76	18210	史-31	36° 00' 06"	136° 18' 04"	080415 ～ 080514	44m ²	現状変更に伴う事前調査
第127次調査	福井市城戸ノ内町字上城戸	18210	史-31	35° 59' 56"	136° 17' 44"	080415 ～ 081205	2,000m ²	環境整備に伴う事前調査
第128次調査	福井市城戸ノ内町字八地	18210	史-31	35° 59' 57"	136° 17' 44"	080515 ～ 080702	120m ²	試掘調査

調査区	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
第126次調査		室町・戦国時代 (15・16世紀)	石垣	越前焼、土師質土器、 瀬戸・美濃焼、 中国製陶磁器	
第127次調査	屋敷	室町・戦国時代 (15・16世紀)	石垣6、礎石建物1、 土台建物1	越前焼、土師質土器、 瀬戸・美濃焼、 中国製陶磁器(元染付)、 漆器、木製品	大溝を検出
第128次調査		室町・戦国時代 (15・16世紀)	礎石建物、溝	越前焼、土師質土器、 瀬戸・美濃焼、 中国製陶磁器、 朝鮮製陶磁器、 石製品、金属製品	高麗青磁象嵌梅瓶が 出土

特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡 39

平成20年度発掘調査・環境整備事業概報

発行年月日 平成21年3月31日

編集・発行 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館©

印刷 河和田屋印刷株式会社